不良老人発生のメカニズムについて

田　井　康　雄
（教育学科教授）

1　はじめに

情報化社会の進展により，情報にかかわるさまざまの矛盾や犯罪が次々と起りつつある現在，情報教育が単に情報機器の操作にかかわることだけではなく，情報倫理や情報吟味の教育であることが求められつつある。さらには，一時的な情報に振り回されない，本来の情報の意義や利用方法の研究に基づいた情報教育が行われなければならない。

情報とは，「あることがらについてのしらせ」であり，「判断を下したり行動を起したりするために必要な様々の媒体を介しての知識」[1]である。したがって，人間が主体的に行動する目的をもち，その目的を実現するために情報を利用できるのであれば，情報本来の利用の仕方を行っていることになるし，すべての人間がこのような情報の利用を行っているなら，「情報が物質やエネルギーと同等以上の資源とみなされ，その価値を中心にして機能・発展する社会」[2]という情報化社会の定義は成立することになる。しかしながら，現実の社会は必ずしも情報を利用するための主体的目的もないままに単に情報機器を買い込み，その多様な機能を情報教育によって教えられ，必要もないのにその機能を利用しているつもりになって，情報に踊らされているのが大多数の人々の情報機器の利用状況であると言っても言い過ぎでない。情報機器を使っているという意識だけにその意義を求める人や，情報機器のもつ機能を自らの主体的能力と思い込んでひとり優越感を抱いている人，さらには，情報を利用する目的における倫理観の喪失など，情報教育にかかわるさまざまの問題が教育全体に大きく影響を及ぼすようになってきている。

情報教育に携わる人々は情報倫理の教育の必要性を唱えているが，情報倫理の基本は情報を利用する目的の倫理性の吟味を基礎にする問題である。しかしながら，現在の情報化社会における真の問題はそのような浅薄な表面的問題に止まらないことに，われわれは注目しなければならない。

情報を倫理的に問題のある目的に用いないという考え方は教育理論の基礎であり，ヘルバルト（Johann Friedrich Herbart, 1776～1841）やシュライエルマッハー（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768～1834）が教育の目的を倫理学に求めるという常識的な考え方の延長上にあらわれてくる。現状の情報氾濫や情報教育の問題点はそのような単純な問題ではなく，情報化社会における情報化と社会における教育構造そのもののアンビヴァレンスなのである。本来教育とは「年長世代（ältere Generation）の年少世代（jüngere Generation）に対するはたらきかけ（Einwirkung）」[3]であり，そのような世代間のはたらきかけとしての教育は年長世代の年少世代に対する愛情と年少世代から年長世代に対する尊敬の感情，さらに，それらによって生じる相互信頼の意識によって成立するものである。しかるに，現在の情報化社会においては，情報機器の操作をマスターしているのは必ずしも年長世代ではなく，しかも，情報機器をマスターすることが現在の情報教育のもっとも重要な目的であるという考え方が広まりつつある。このような状況において，教育的関係の基本である

年長世代と年少世代の世代間の教育的関係が成立しにくくなりつつある。これこそが，現在の最大の教育問題なのである。

年長世代と年少世代の間に正常な教育的関係が成立しないことによって生じる問題のうち，最も大きな問題が年少世代の年長世代に対する信頼と尊敬の念の不成立の問題である。なぜなら，「教育的影響は被教育者が教育者的立場に立つ人に対して信頼と尊敬の念もつ時，はじめて成立してくる」[4]のであるから，逆に年少世代が信頼と尊敬の念を年長世代に対してもてなくなると，世代間の教育的関係は崩壊し，世代間の教育は成り立たなくなる。しかも，年長世代は自らが教育者的立場に立つという自信と誇りを失ってしまう危険性が生じてくる。その結果，年長世代，とりわけ，老齢者の不良化現象が起ってくるのである。現実にこのような傾向が徐々にあらわれつつあることは否定できない。

本論稿では，このような不良老人発生のメカニズムについて考察していきたい。

2　相互関係としての教育的関係成立の要素

教育的関係が教育者から被教育者への一方的な関係でないことは，コンピュータの著しい発達にもかかわらず，ティーチングマシーンが普及できないという事実が示している。それは教育的関係が教育者と被教育者の相互関係であり，しかも，その関係の根底に理性だけで処理できないきわめて人間的要素が含まれているからである。ここでは，まず，このような要素について考察していきたい。

(1)　被教育者の教育者への尊敬心

教育的関係において，被教育者の立場に立つ者は教育者の立場に立つ者に対して信頼と尊敬の念をもつことが必要条件である。教育者的立場に立つ者が教育意図や教育目的をもっていなくても，被教育者的立場に立つ者が信頼と尊敬の念をもっていれば，自らの自己形成によってその人間関係を教育的関係へと変化させる。逆に教育者的立場に立つ者がいかに努力しても，被教育者的立場に立つ者が信頼と尊敬の念を教育者的立場に立つ者に対してもたなければ，教育的関係は成立しないのである。もちろんそのような信頼や尊敬の念は教育者的立場に立つ者の教育愛や専門性に導かれるのが普通であるが，教育者的立場に立つ者がそのような教育愛や専門性をもっていなくても，被教育者的立場に立つ者がそれを感じさえすれば，被教育者的立場に立つ者の独りよがりであっても，教育的関係は成立し，教育的影響を受け取ることができるのである。したがって，被教育者にとって教育者に対する尊敬心は教育的関係を成り立たせる第一条件と言うことができるのである。

このような教育的関係を成り立たせる要素としての尊敬心は世代間の教育的関係においても当てはまると考えられる。世代間の教育的関係が成立している社会においては，年長世代がつくり上げてきた文化に年少世代は大きな価値を認め，その価値を受け継ぎたいという欲求とともに年長世代そのものに対する尊敬心をもつようになるのである。社会の恒常的発展はこのような世代間の相互信頼と尊敬の意識によって進展していくのである。

(2)　教育者の自尊心

教育者的立場に立つ者が被教育者的立場に立つ者に対して教育愛をもつことができるのは，教育者的立場に立つ者が被教育者的立場に立つ者の信頼と尊敬の念をもたれていると感じられている時である。教育的関係は正常な人間関係をその前提にして成り立つものであり，教育的関係を成り立たせる教育愛（アガペー）は正常な人間関係を成り立たせる相互信頼を導く愛（フィリア）を前提にして成立してくる。人間は自ら自然にもてる価値愛（エロース）や相互愛（フィリア）を前提にして，自らの意識的な努力によって教育愛につながるアガペーが成立してくるのである。

「教育愛はその基礎の正常な人間関係を成り立たせるフィリアとともに，アガペーを教育者がもたなければならない」[5]総合的な愛であり，教育者自身の教育意図に導かれた努力の要る愛なのである。教育者的立場に立つ者がこのようなアガペーをもつ努力をすることができるのは，自らに対する被教育者からの尊敬と信頼の感情

を感じられた時である。その時，教育者的立場に立つ人間は尊敬され，信頼されているという自尊心によってアガペーを起すことができるのである。つまり，教育者的立場に立つ者が被教育者的立場に立つ者からの信頼や尊敬の念を感じられない時，教育者的立場に立つ者はアガペーをもつことはできず，教育的関係を成立させることはできないことになる[6]。それゆえ，儒教倫理が確立している社会のなかで，老人が老人として尊敬されているような状態における教育的関係は比較的良好に成立していくと言うことができる。

人間が社会的動物であり，しかも，自尊心をもつ年長世代であれば，年少世代に対する教育的配慮は自然に行うものであり，人間社会における世代間の教育は本質的に成立するものなのである。世代間の教育を成り立ちにくくしているのは，世代関係そのものを成り立たせないような現象が起きてくる時である。現在の情報化はそのような現象の一つなのである。

情報化社会における教育的関係はあらゆる教育がすべて情報教育に導かれているような錯覚を大部分の人々に引き起している。このような誤った考え方が年長世代に教育者的立場に立つ者がもたねばならない自尊心を失わせてしまう原因になっているのである。情報教育はあくまで人間教育の一つの手段教育に過ぎず，情報機器の操作に優れている人間が人間として優れているという固定概念を社会全体が再吟味しなければならない時が来ている。

(3) 教育者の被教育者に対する優位性

教育的関係が被教育者の教育者に対する信頼と尊敬の念を基礎にすることを明らかにしたが，そのような尊敬の念はどこから生じてくるのであろうか。それは教育者の被教育者に対する優位性に起因すると言うことができる。被教育者が自らもたない能力をもつ人に尊敬の念をもち，その能力を手に入れたいと考える時，教育的関係を被教育者の側から積極的につくり上げようとする。

自己形成的存在である人間は常に自らの自己形成欲求を満たしてくれる存在を教育者として求めたいという欲求をもつのであり，一般には年少世代は年長世代に対してそのような欲求をもつがゆえに，世代間の教育が自然に成り立ってくるのである。

年長世代は年少世代に比べ経験・知識・技術等さまざまなものにおいて優位性をもつのが普通である。それゆえに，世代間の教育はごく自然に成立するものなのである。しかしながら，現代社会のような急激な情報化の過程において，情報機器の操作だけが情報教育の内容であり，しかも，情報教育がすべての教育に勝る重要性をもつというような偏見に振り回されている人々がきわめて多い状況のなかで，年長世代に対する年少世代の尊敬心は失われるのはごく自然の現象なのである。年長世代の優位性は情報教育においてのみ測るという考え方は誤っている。情報教育は人間の情報処理能力を補うための教育であり，人間教育そのものではない[7]。

しかるに，情報教育を未来につながる教育と判断する浅薄な考え方に導かれて，年長世代に対する信頼と尊敬の念が徐々に失われつつある現状は，人類がコンピュータに支配されるというＳＦ小説の始まりにもなりかねない人類の危機である。

(4) 年少世代の年長世代化

年少世代が年長世代から教育的影響を受け，既存社会のもつ文化を習得しつつ既存社会に適合していくとともに，自らの思考形態における変化（現在志向性から未来志向性への変化）によって，年少世代の年長世代化が自然に行われていく。このような年少世代の年長世代化は年少世代の年長世代に対する信頼と尊敬という前提によってはじめて成立してくるものである。年少世代にいる者が年長世代に対して信頼と尊敬の念をもつことが世代間の教育的関係を成立させる基礎であり，そこに，年少世代の年長世代への模倣欲求が成立してくるのである。

人間は自ら信頼と尊敬の感情をもてる対象を模倣し，そのような状態になりたいと真剣に思うようになる。そこで，おとなのもつ未来志向性という性質そのものを模倣したいという欲求がしだいに子どものなかにあらわれてくるので

ある。そのような基本的条件が整うからこそ，「教育的はたらきかけの本質は未来に向けられている」[8]という教育独特の性格があらわれてくるのである。子どもがおとなになるためには，このような子どものおとなに対する信頼と尊敬の念に裏打ちされた模倣欲求が存在するからこそ，年少世代の本質的性向が現在志向性から未来志向性へ自然に変化していくのである。それゆえ，子どものおとなに対する信頼と尊敬が存在しない社会状況においては，子どもの現在志向性は未来志向性へと変化しにくいことになる。つまり，子どもがおとなに対して模倣欲求をもたないために，いつまでも現在志向性をもち続けることになるのである。

このような状況においては，年長世代にいるおとなにとっても，大きな問題であり，自らの自尊心をもち続けることが困難になり，おとなとしての未来志向性を失い，現在志向性へと退化していくのである。ここに年長世代の「不良化」が起る根本的原因が潜んでいるのである。

ここで，「不良」という概念について考察しておく。

3　「不良」の定義

不良とは「品行のわるいこと。また，そういう人」[9]であり，また，品行とは「道徳の上から見た，おこない。行状。操行」[10]である。つまり，不良とは「道徳的に見た行いが悪いこと，または，そういう人」のことである。したがって，不良は一般に子どもが成長・発達に伴って社会化する過程で既存社会の規範に対して反発したり，その規範から逃避したり，他の人々との人間関係を無視する行為として特徴的にあらわれてくる。不良とは年少世代が社会化の過程において何らかの原因によって逸脱することによってあらわれてくるのが普通である。それゆえ，不良とは不良少年や不良少女を意味することが普通である。

年少世代は年長世代からの教育的影響を受け，年長世代化していくものであり，その年長世代化の過程で生じる社会的逸脱によって不良化現象が発生するのである。つまり，不良化現象とは，人間の社会化の過程において年長世代からさまざまの文化や社会的ルールとしての慣習や常識を一方的に教え込まれる過程において，年少世代のうちに発生するものである。年長世代の年少世代に対する教育的はたらきかけは，親子間の教育や教師と生徒の間の教育のような意図的な教育的はたらきかけだけでなく，ともに生活するうちに自然に伝わっていくような要素も含まれてくる。そうすることによって年少世代は既存社会に適合できるようになるのであるが，そのような年長世代からの教え込みについていくことができなかったり，反発したりすることによって，年少世代の不良化現象はあらゆる社会において恒常的にあらわれてくるものである。

不良化は明確な自己意識をもつ人間が社会化しなければならない存在であり，しかも，その社会化が教育的はたらきかけや教育的影響によって実現されるものであるからこそ，生じてくる現象であると言うことができる。さらに，不良と判断される根拠は社会的規範から外れていることであり，そこに，社会的逸脱や不道徳という評価が下されるのである。しかも，そのような評価を下す主体は既存社会をつくり上げ，維持している年長世代なのである。不良化は世代間の文化伝達が正常におこなわれている限りは起りえない現象である。年長世代は自らつくり上げてきた既存社会の文化に誇りをもち，その誇りのゆえに常に未来志向性を維持し，年少世代に伝達したいという欲求を自然にもつのである。それは自らの未来の延長上には，自らの子孫への文化の伝達が必然的につながっているという意識をもっているからである。

4　年長世代における老齢期の意義

以上のように，不良とは年少世代の社会化の過程にあらわれてくる現象であるが，その不良という判断は年長世代の価値観から生じてくるものである。既存社会の構成員として積極的役割を演じている年長世代は既存社会で活動できること自体に意義を感じ，それを尊重しようとする。それゆえ，年長世代が年長世代としての

役割を演じることが比較的容易に行えるのは，社会構成員として積極的に活動できる成人期である。社会的生活から引退する老齢期において，年長世代としての未来志向性をもち続けること自体に困難さが伴うのである。

老齢期における年長世代が未来志向性をもち続けることによって，老齢期の意義があらわれてくるのであるが，現代社会はこのような老齢期の年長世代のもつ意義を認めにくい状況にある。

老人の「働きはもはや経済的に生産性をもたないし，また彼らが知っていることも覚えていることもほとんど時代遅れだからである」[11]というような考え方が主流になり，老人に対する尊敬心を失いつつある現在，われわれは老齢期の本質的意義を再認識しなければならない。

「わたしたちの一般的な人生は，学校に行くようになってから，勤め先を定年で退職するまで，自営業を営んでいてもその職業から退くまで，組織づけられた社会的な枠に依存して生活を成り立たせている」[12]のであるから，老齢期にある人々が年長世代としての意識をもち続けるためには，社会とのかかわり（しかも，積極的主体的なかかわり）が存在していなければならない。

「定年退職後は悠々自適するというような年齢段階に応じた人生の切り替えは不可能であり」[13]，何らかの形で社会との積極的主体的なかかわりをもつことが老齢期における人々が年長世代としての意識をもち続けるための基礎条件なのである。

人間が老化するということの一つのあらわれである身体的衰退を避けることはできない。しかしながら，人生の経験そのものは，老化の過程に伴ってますます豊かに増加していくことも事実である。老化とともに経験が増すことを自ら自覚することがない場合，老化は人間の精神を衰弱させる。逆に老化は同時に経験の増加や人生の豊かさに資するものであるという意識をもつことによって，老化は人間の精神を活性化し，若々しい精神（未来志向性をもち続ける精神）を生み出すのである。

「老人の世界との直接的なつながりからの離脱は，単なる欠乏ないし衰弱とみられるのではなく，個人的なものの消滅による普遍的なものの発現の過程とみられるべきである」[14]が，一人ひとりの人間がそのような普遍的なものの発現を可能にできるような教育は現実に存在していない[15]。それゆえ，老化に積極的意味付けを行えるのは，老化を自ら積極的に自覚することでしかないのである。老化を明確に自覚することによって，自らに対する自尊心があらわれるとともに，年少世代（だけでなく，年下の年長世代）に対しても教育的影響力を与えなければならないという意識が生じてくるのである。老人にとって，自己意識は自己自身という個人的なレベルの意識ではなく，自らの子孫や未来の人類をも含めた自己意識としてあらわれてくる。そのためにも老人に対する尊敬心が失われないような社会的条件が必要なのである。

しかしながら，現在，価値観の多様化と急速な情報化社会の出現によって，年少世代の年長世代に対する信頼と尊敬が失われ，むしろ老齢期にある年長世代を介護の対象としてしか捉えられないような社会的風潮があらわれてきている。このような状況において，老齢期にある年長世代が年長世代としての未来志向性を維持することが困難になりつつある。ここに年長世代の不良化が起る外的条件が整ってくるのである。ここで，老人を不良化させている要素を取り上げ，そのメカニズムについて分析したい。

5　老人を不良化させるメカニズム

老齢期の年長世代の不良化とは，年長世代として年少世代に文化の伝達をおこなわねばならないという社会的責任を放棄し，自らの私的欲求のみに執着するような現在志向性を意識的にもとうとするところにあらわれてくる現象である。価値観の多様化と混乱，さらに，情報化社会の進展による年長世代の教育機能の軽視という世代間の総合的混乱において，年長世代が年少世代に対する教育愛を失うことにつながるのである。

この構造について分析する前に，このような

老人の不良化が起る外的要因と内的要因について考察することにする。

(1)外的要因

①経済至上主義

現代社会はあらゆる事柄を経済的価値から判断する風潮が広まっている。「現代社会自体がエロースに導かれた経済至上主義に包まれている」[16]ために，経済的能力によって人を判断することが日常的に行われている。それゆえ，老人についての問題を論じる場合も，「今日老人福祉においてしばしば自助努力がいわれるが，老人はいずれ誰かに迷惑をかけ，依存するほかなくなる。したがって，社会全体としては迷惑を掛け合う構造になっていないと，老いは安心したものにはならない」[17]という基本的な考え方が採られ，社会保障や介護の問題などすべて経済的平等性を大前提にすることが当然であるかのごとく考えられている。

経済至上主義的な観点から見れば，老人は基本的にはマイナスの要素として捉えられるのは当然である。このような経済至上主義的な観点は老人の本質を見失わせる観点である。つまり，老人のもつ価値は，経済的観点からは否定的な評価しかできない要素をきわめて多く含む価値である。老人を正当に評価し，老人のもつ「老人力」を正当に評価しない社会こそが不良老人を生み出す第一の外的要因であると言うことができる。

老人の中にも経済至上主義的なものの考え方を採る人は多い。そのような老人は自らの能力を不当に評価し，自ら進んで不良化していくこともある。老人としての誇りを老人自身がもつことこそが，不良老人発生を食い止める条件である。

以上のような意味においても，経済至上主義的な社会状況を是正することは現代社会の緊急の課題であると言うことができる。

②情報化社会の進展

情報化社会の進展に伴って，情報教育こそが現代教育の中心であるかの錯覚に陥っている人々はきわめて多い。しかも，情報教育という点において，老人は最もその教育の恩恵を受ける必要のない立場に立っている。つまり，情報教育は人間が生活を行っていく上において，必要な情報処理能力を養うことを目的とする教育である。年少世代は年少であればあるほど，情報処理能力をもっていない。それゆえ，年少世代にとって情報教育は必要不可欠になってくる。しかしながら，年長世代（とりわけ，老人）は現在までの生活において経験的に情報を処理する能力を身につけているわけであって，老齢期において若者が学習しなければならないパソコン教育を受けて新たな方法での情報処理能力をつける必要性は老人にはどこにもない[18]。

しかも，情報教育に携わる人の中には，情報教育こそがこれからの教育の中心になるという妄想をもち，情報教育が最も不得意である老人を軽蔑するような社会的風潮まで生まれつつある。このような状況において，老齢期の人々は自らのパソコン操作能力の限界を知ることによって，年長世代としての自尊心を失い，不良化する場合もある。情報化社会においてこそ，老人のもつ固有の情報処理能力を尊重し，パソコンを使わないで行われる情報処理方法に対する尊敬の念を年少世代がもつべきであると考えられる。

③老人を弱者とみなす傾向

近年老人福祉の考え方が広まり，老人を弱者として捉え，介護の対象としてのみ考えることが当然とされつつある。しかしながら，老人の中には，必ずしもそのような見方を喜ぶ人ばかりではない。むしろ介護の対象として見られることによって自らの主体的能力や意欲を無視されると感じる人もいる。

「老人福祉法の基本理念が老人をまず過去に能力を発揮したものととらえるのにたいして，社会的弱者の発想は老年を現在において能力が不足・欠落するもの，無能力なものとしてとらえる」[19]ことにつながり，差別的な考え方と見ることもできる。老人福祉や介護の考え方は，第一にその対象である老人自身の意識や主体性を尊重するものでなければならない。

「老いの時間のおおかたは，自分のこれまでの生活史の中にもどっていって，その中で独自

の仕方でくりかえし生きることについやされる」[20]のであるから，病状や生活状態の表面的判断によって一律にその対応を決定することが返って老人の尊厳を無視することに気づかなければならない。個々の老人には自らの独自の人生があり，その人生において培われた体験を無視するような介護には，十分な注意が必要であることを忘れてはならない。「社会のために，そして，その人にとっては家族のために大きい努力を続けた代償として，晩年をまったく冷たい環境のなかに生きねばならぬ，ということは実に痛ましいことのように思われる」[21]のであり，その意味でも，老人の主体的意志に基づく介護が実現されなければならない。介護はその介護を受ける側の欲求や必要性を満たすことを大前提に行われなければならない。

「介護イコール善」であるという先入観こそが老人の人格を無視することにつながる危険性のあることを，われわれは認識しなければならない。人格を無視されることによって，人間としての誇りを失うことがあれば，そこに不良老人をつくり出す可能性は少なくないと言わざるをえない。

④若者中心文化

現代社会の一つの特徴に若者中心文化の傾向がしだいに強まってきていることが上げられる。この考え方は，教育における行き過ぎた児童中心主義や，そこからあらわれてくる「支援の教育」の結果と言うことができるかもしれない。文化とは，人類がそれまでの歴史においてつくり上げてきた価値の総体であり，若者文化も若者が独自につくり出したと言うよりは，年長世代の文化を受け入れながらも，そこに新たな創造を生み出すことによって成立するものでなければならない。しかるに，現代社会における若者中心文化は，年長世代がつくり上げてきた文化とは無関係に自らの勝手な考え方から思いついて偶然出来上がった文化であり，その名に値しないものと言っても言い過ぎではない。

情報化と価値観の多様化の著しい現代社会はこのような若者のつくり出した文化を認めてしまい，一部の年長世代の中には，そのような若者文化を評価する者もいる。さらに，マスコミ関係者の中には，新しい吟味されない情報や考え方を進んで取り入れ，本来の価値の総合体としての文化を批判するための材料に若者中心文化を据えている者もいる。そして，そのような人々は若者中心文化から判断して古い文化を批判の対象として取り上げ，その担い手である年長世代（とりわけ，老齢者）に対する批判の目を向けるのである。

その結果，老人に対する社会全体の信頼と尊敬の意識が失われ，老人自身も自らの自尊心を失い，不良化する場合もあらわれてくるのである。若者中心文化が古くからある本来の文化を継承する形で展開していれば，むしろ文化そのものの活性化につながるのであるが，古い文化を無視した形で成立してきている現在の若者中心文化には大きな問題があると言わざるをえない。

(2)内的要因

①未来志向性の現在志向化

年長世代としての基本的特徴である未来志向性はおとなとしての基本的性質であり，「現在志向性をもつ年少世代に教育的はたらきかけを通じて，未来志向性をもたせることが世代間の教育の目的であり，それが十分に行われるためには，年長世代にいる者が年長世代としての特徴である未来志向性を身につけるとともに意識していることが必要なのである」[22]。しかしながら，老齢化した年長世代のうちには，おとなとしての未来志向性を現在志向性へと意識的に転換する人がいる。これこそが不良老人化の第一歩である。

このような未来志向性の現在志向化は，現役社会からの引退と同時に，悠々自適な現在志向的な生活に没頭しようと意図的に考えることによって成立してくるのであるが，それでも，長年行ってきた年長世代としての自覚は完全には現在志向化することはできない。

シュライエルマッハーによると，「あらゆる教育的はたらきかけは一定の瞬間を未来の瞬間のための犠牲にするものとしてあらわれてくる」[23]のであり，年長世代から年少世代に対して行わ

れる「教育的はたらきかけの本質は未来に向けられている」[24]のであるから，「年長世代に属する者が行う自己活動（自己形成活動を含めて）は多少なりとも教育者的要素をもっていることになる」[25]。つまり，ひと度年長世代として未来志向性をもつようになると，基本的には現在志向化することはありえない。もし年長世代が現在志向化するとすれば，それはかなり意図的な現在志向化が行われなければならない。

年長世代（老齢者）の不良化はそのような確信的な行為によって実現してくるのである。このような年長世代の意図的不良化は，年長世代としての自尊心の喪失によって起ると考えられる。ここで，年長世代の自尊心の喪失について考察する。

②自尊心の喪失

年長世代，とりわけ老齢者は自らの人生の成果を自覚しながら，年長世代としての自尊心を本来もっていると同時に，身体的精神的な弱体化に常に悩んでいる存在でもある。それは「『お年寄り』は文化的価値を備えた尊敬の対象であり，若い世代を文化的に導いてくれる存在であるという側面と，社会的弱者であり，介護の対象として保護しなければならない存在という側面をもっている」[26]からである。

老齢者は自らの人生に誇りをもって生活してきたからこそ，年少世代にさまざまの知識や文化を伝達したいという基本的欲求をもつのである。しかしながら，老齢者に年長世代としての自尊心をもつことを許さない社会状況がさまざまのところにあらわれている。つまり，老齢者のもつ後者の性格（社会的弱者であり，介護の対象という性格）が強調され，自尊心をもつことが許されないような状況がある。このような状況において，老齢者としての恥を感じなくてもいいような社会的風潮まであらわれてきている。結果として，必ずしも老齢者が自尊心をもたなくてもいい状況が出来上がりつつある。

年長世代に対する期待が薄れ，老齢者を一方的に弱い存在とみなし，介護の対象として見る社会において，自尊心を主体的にもつためには，老齢者として自らの人生に対する自信をもっていなければならない。つまり，現代社会は老齢者が老齢者としての自尊心を喪失させる方向に傾きつつあると言うことができる。ここに老人の不良化が起りつつある危険性が存在しているのである。

不良という概念は，年少世代においては，社会化の過程における逸脱としてあらわれてくるが，年長世代，とりわけ，老齢期の人間における不良化とは，年少世代に対する文化の伝達や教育的はたらきかけという年長世代としての役割を放棄し，自らの老齢者としての自尊心を喪失し，年少世代に対する愛情をもてず，個人的欲求に走ることに何の羞恥心も感じなくなることによって特徴づけられる。このような老人の自尊心の喪失こそ，不良老人を生み出す直接的な原因なのである。

③年少世代に対する教育愛の喪失

「世代間の教育が成り立つ基本的要素は世代間の人間関係であり，とりわけ，教育者的立場に立つ年長世代が年少世代に対して愛情をもって接することは，世代間の人間関係を成り立たせる基本的条件である」[27]。しかしながら，現代社会において，少子化，育児放棄，幼児虐待，零歳児保育園の増加，親子関係の疎遠化，核家族化等，世代間の関係そのものが疎遠化しつつあるさまざまの現象があらわれてきている。これらの現象は年長世代の年少世代に対する教育愛の喪失の結果，あらわれてきた現象であると言える。しかも，年長世代も年少世代もともに，人間としての精神的な「心のつながり」や愛情というものを軽視し，あらゆることを物質的・経済的な功利主義的観点でものを考えるようになってきた結果であると考えられる。人間関係の基礎は「心のつながり」であり，そのために「心の教育」の必要性が唱えられながら，現実的にはますます人間関係の疎遠化があらゆるところにあらわれてきている。

このような状況において，老齢者の年少者（年少世代だけでなく，年少の年長世代）に対する教育愛の再興が望まれる。自らの豊かな経験をすべての年少者に還元し，年少者に文化的価値を与えるという教育愛をもたなければなら

ない。「教育愛はその基礎に正常な人間関係を成り立たせるフィリアとともに，アガペーを教育者がもたねばならない」[28]。フィリアは相互愛であり，人間関係に自然にあらわれてくる愛であるが，「アガペーは『与えたい』という授与的欲求であるとともに，努力を要する愛である」[29]がゆえに，教育者的立場に立つ者は教育活動を行う時には，意図的にアガペーをもつ努力が必要なのである。

老齢者が自らに対する年少者からの信頼と尊敬の念を感じられない現状においても，自ら努力することによって年少者に教育愛（アガペー）をもつことがきわめて難しいことは事実である。そのような意味において，老齢者の不良老人化が起りやすい条件がそろっているのも事実なのである。老齢者が自ら進んで年少者に対してアガペーを意図的にもって，文化伝達を行える意欲をもたなければならない。しかしながら，現代社会を支配している経済至上主義の風潮は老齢者においても利己主義化を勧め，本来もつべき老齢者としての教育愛すら失われつつあることは否定できない。

(3)両者の関係

老人の不良老人化の外的要因と内的要因について考察を続けてきたが，基本的には不良老人化は外的要因によって起り，展開していることが明らかになってきた。とりわけ，外的要因のうち経済至上主義的なものの考え方は，その他の外的要因（情報化社会の進展，老人を弱者とみなす傾向，若者中心文化）や内的要因（未来志向性の現在志向化，自尊心の喪失，年少世代に対する教育愛の喪失）のすべての根本的原因であると言うことができる。それゆえ，経済至上主義的なものの考え方に基づく社会状況の変化によって不良老人がさらに大量に発生し，今後さらに増加することが予想されるのである。

経済至上主義的なものの考え方は人類の発展をもたらしてきたという事実は認めざるをえないが，それは同時に，地球環境破壊や地域による経済格差を引き起してきた。経済至上主義はそのような物質的なものの発展における破綻だけでなく，人間の精神的なものの破綻をも引き起しつつあるのである。

このような破綻は，さらに利己主義的な経済至上主義へと堕落していくことになってあらわれてきている。少子化こそ，まさにその典型的なものであると言うことができる。人類全体を視野に入れ，自らの老後はその子孫の未来のためにあるという考え方が，年長世代の年少世代への愛情の基礎にあらわれてくるのであるが，現在の老人の中には死によって人生が終るのであり，死によってすべてが無になってしまうという無宗教な考え方を科学的な考え方と思い込んでいるが，実はこの考え方はきわめて利己主義的な発想なのである。というのは，人間は人間関係においてのみ人間として生きることができるという基本的考え方は，人間の生死は他の人間（とりわけ，子孫）に何らかの影響を与えるものであるという根本的関係を無視しているからである。

このような生死の意義や宗教的なものの考え方は，年齢を重ね，経験豊かな老齢者においては当然のことであるが，一部の老齢者においては，あくまで無宗教であることを科学的であると思い込んでいる場合が多い。これこそ不良老人の特徴であると言うことができる。

一般に老人は自らの子孫とのつながりにおいて，未来志向性を維持していくのであるが，その子孫とのつながりを維持するために，自らの有限性を克服する宗教的なものに対して畏敬の念をもたざるをえない。しかるに，老齢者になっても，宗教的なものを否定し続けるのは，完全に自らの存在のみの利益しか考えられないきわめて極端な利己主義的発想なのである。経済至上主義において，利己主義的傾向が重なることによって，子どもを生み育てることに要する費用と子どもが生み出す経済的価値を比較することが常識になり，その延長上に，老人としての不良化が起ってくるのである。

6　おわりに

不良老人発生のメカニズムについて考察を行ってきたが，不良老人には二種類があると考えられる。一つは社会的状況によって導かれる

不良老人である。現代社会のように価値観の多様化や情報化によって従来の文化に対する批判が次々とあらわれるような時代においては，年長世代，とりわけ，老齢者は信頼と尊敬の対象になりにくい。その結果，生じてくる不良老人である。もう一つは，本質的な不良老人であり，きわめて利己的で自分以外のもののために愛情や尊敬心をもつことはなく，いかなるものに対しても畏敬の念をもてない老人である。このような老人は終生無宗教であり，他人を本質的に信頼することができないだけでなく，常に他人を軽蔑しつつ，利用するような老人である。

前者のような不良老人は，社会状況の変化によって多数発生することも，減少することもあるが，後者のような不良老人は時代や社会の変化とは無関係に存在する不良老人である。それゆえ，前者のような不良老人については，社会的状況の改善や教育的はたらきかけによってある程度は，その発生を制御することができるが，後者のような不良老人については，教育的な対応は不可能である。

本論稿で取り上げた不良老人発生のメカニズムに関しては，主に前者の不良老人に関するものである。現代社会が不良老人を生み出す危険性をきわめて強くもっているという事実をわれわれは認識するとともに，そのような社会状況のあり方について，不良老人発生という視点から吟味することによって，社会全体のあるべき姿を追究していく必要性ついて考察することが必要である。老人の特性を尊重し，老人に対する信頼と尊敬の念をすべての年少世代がもつことによって，老人はすべての年少者に対して愛情をもって接することができるのである。一部の例外 は別として，不良老人は社会のあり方によって発生するのである。そして，現代社会こそ，不良老人を生み出す典型的な社会になっていることを十分に認識しておくことが必要である。

註

1　新村　出編『広辞苑　第五版』岩波書店，1998年，1331頁。
2　新村　出編，同上書，1331頁。
3　C. Platz : Schleiermachers Pädagogische Schriften. Mit einer Darstellung seines Lebens. Neudruck der dritten Auflage. 1902, S. 8.
4　田井康雄著「人間形成的視点から見た教育指導者としての条件」教育学・心理学論叢（京都女子大学大学院文学研究科研究紀要2005），2005年，6～7頁。
5　田井康雄・中戸義雄共編『探究・教育原論―人間形成の解明と広がり―』学術図書出版社，2005年，44頁。
6　このことが不良老人を発生させる根本原因であると言うことができる。
7　むしろ情報機器を操作する能力を習得し，情報機器を使うことに堪能になるにつれて，しだいに人間自身の本来もつ情報処理能力が失われていくという事実を認識しなければならない。
8　C. Platz : a. a. O., S. 53.
9　新村　出編，同上書，2369頁。
10　新村　出編，同上書，2292頁。
11　伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明編『老いの発見1　老いの人類史』岩波書店，1991年，85頁。
12　伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明編，同上書，99頁。
13　岡田渥美編『老いと死―人間形成論的考察』玉川大学出版部，1994年，47頁。
14　岡田渥美編，同上書，51頁。
15　デス・エデュケーションは唯一具体的な教育実践として行われつつあるが，必ずしも全般的な影響力をもつまでに至っているとは言いがたい。
16　田井康雄・中戸義雄共編，同上書，46頁。
17　岡田渥美編，同上書，48頁。
18　もちろん老人自身が自ら進んでパソコンの操作を習得したいという興味と欲求をもつ場合は，それ自体問題はないが，自ら経験的に行ってきた情報処理能力を放棄してまで，新たなパソコンによる情報処理方法をマスターする必要性は全くない。
19　伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明編『老いの発見２　老いのパラダイム』岩波書店，1991年，101頁。
20　伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明編『老いの発見３　老いの思想』岩波書店，1991年，29頁。
21　伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明編『老いの発見４　老いを生きる場』岩波書店，1991年，18頁。
22　田井康雄著『シュライエルマッハー教育思想の研究』京都女子大学研究叢刊32，1998年，43頁。
23　C. Platz : a. a. O., S. 51.
24　C. Platz : a. a. O., S. 53.
25　田井康雄著『自己形成原論―「人間らしさ」

を育む道徳理論の研究―』京都女子大学研究叢刊41，2004年，42頁。

26 田井康雄著「年長世代の教育的意義の変化についての一考察」教育学・心理学論叢（京都女子大学大学院文学研究科研究紀要，2004年，10頁。

27 田井康雄・中戸義雄共編，同上書，33頁。

28 田井康雄・中戸義雄共編，同上書，44頁。

29 田井康雄・中戸義雄共編，同上書，42頁。

30 本質的な不良老人は，社会的環境のあり方とは無関係に発生してくる。この点についての研究は，心理学的研究が必要であると考えられる。